巻頭言

円と直線と菱形

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構　理事
田島　保英

部分がそれ自身をも含む全体を認識する、とは抑何を意味するのか。それは自同律と対応の問題に帰し得るものなのか、思考モデルの架構の問題なのか、或は「意識と存在」といった宇宙構造の総体に関る認識の問題であるのか。これまで生物が築き上げてきた思考の集積は、慥かに、時間と空間の構造について、物質の力学と運動学を手段に、ミクロからメソ、マクロまで一応脈絡の通った説明をすることに成功している。しかし、それにしても、ミクロ世界の数学に裏打ちされた単純な厳密さに較べて、我々が知覚し棲息する空間レベルの猥雑な賑やかさは、推論の及ばぬ奇跡とも見える。

ところで、ミクロからマクロへの構造の連関と反映からは離れて、地上において自然が思いもよらず描いてしまった幾何学形状はないものか、物心ついてよりずっと気になっている。勿論、岩塊の路頭に見られる柱状節理のパターンなどミクロの幾何学構造がマクロな形状に反映した様を観察できる例は少なからず存在するし、一定の拡がりをもつ静水面を大凡理想平面と見なすことは出来るが、人工物を除けば地上で見る自然物の「かたち」が理想的な幾何学的形状を呈することは極めて稀に思われる。

かつて原研に計算科学技術推進センター（CCSE）が設置され、駒込の理研旧館での一年間の活動を経て移転した先の、中目黒の金材研建家に通っていた頃のことである。電車通勤の車窓から見える山手線沿いの煤けた擁壁に、或るとき白い大きな円環が鮮やかに描かれているのに気がついた。幾度か観察するうちに、それは擁壁の中央部の凹所に根付いた蔓草が風に吹かれ、列車の風圧に圧されて回転した際に擁壁の汚れをこすり取った痕跡であると知れた。厳密な、というよりも見事な真円であった。

次は直線である。住まいの近郷の谷津を歩いていて、傍らの林の中にそれを見た。かつては下草を刈り、枝打ちをして手入れの行き届いていた里山も、今では多くが放置され、足下を薮に埋めた自然林と化している。間引きを怠ったため過密に生育した、丈許り高く伸びた羸弱わな杉や広葉の雑木が根元に闇を蓄えている。その蟠る仄暗さの中に、卒然としてその直線はあった。折から黄昏の斜光が、林の中の雑然を袈裟懸けに貫く若竹ほどの太さの鈍く輝く直線を浮かび上がらせていた。それは、一本の杉の頂部に近い横枝の分岐を一端として、その高度ほども離れて立つ低木の幹と枝の二叉にかけて架橋された、看る者を一瞬石化させる緊迫を漲らせた一本の力強い線であった。その終端は低木からさらに降下し、地上に横たわる朽ち木の周囲を幾重かに絡めて食い込んでいた。怖らく、杉に巻き付いて上方に成長した藤蔓が、いつしか隣接の木々を渡って絡み付いた先の樹が枯死し

て、共々地上に倒れ臥そうとした時、杉とその樹を結ぶ線上にあった低木の枝に掛かった藤蔓は、杉に一端を固定された上、謂わば首縊り状態で朽ち木の重みで強く引っ張られた結果、このような直線を林中に呈したものと推察されるのであった。林に踏み入って低木の側から透かし見ても、その堂々たる直線は弛みを排除して間然する処がなかった。

そして今ひとつはホメオスタシスが描いた「かたち」である。三十年ほど昔、職場では予算時期に泊まり込むことがめずらしくなかった。東京本部の地下四階にはシャワー設備があり、深夜作業が一段落したころに、当時十五階の居室から階段を一気に駆け下って水を浴びた。ある日冷水を頭に受けながら足元に眼を落としたとき、踝の直下あたりまで溢れ溜まって泡立っている水面が、面前の壁から一尺の位置に開いた排水口を一つの頂角とする完璧な菱形の部分だけタイルばりの床面があらわになっていた。落ちかかるシャワーの水がタイル面を敲ち、薄く高流速で拡散する勢威と、滞留する水の厚い層とが平衡に達し、シャワー室の四囲の壁からの反射と、さらに排水口からの流量とが相俟ってそのような綺麗な菱形を生んだものだったろう。

不規則の大きな複合が拵えた見事な規則性は、不定形な生き物である我が身の存在の宙ぶらりんさを手痛く揺さぶる。三角形は、しかし、まだ見ていない。